

支部訪問 (4) 相模原支部

弘報部 黒川 鈴谷

平成27年3月 記録

3月10日は強い風が吹く寒い日でした。この日、相模原に行き支部役員の三人の方とお会いして、支部の現状やら問題点についてお話を伺いました。

相模原支部は支部長さんが現職の方なので本当は夜の方が集まるのには都合が良かったのですが、寒い時期の夜の会合は敬遠したいのでOB 役員の畠山さんと奥山さんのお二人にはお願いして4時からにして頂き、現職の校長である大里支部長さんには、公務終了後に途中から参加して頂きました。以下がその時に伺った事の記録です。



座談会 相模原支部の現状を語る

出席者 大里 朝彦 (昭和53年卒)
畠山 民子 (昭和39年卒)
奥山 憲雄 (昭和44年卒)
司 会 弘報部 黒川 鈴谷(昭和35年卒)

左から大里、奥山、畠山の各氏

黒川 本日は3月なのに冷たい強い風が吹く寒い日ですが、こんな日にお集まり頂いて申し訳ございません。大里支部長さんは現職の方なので本当は夜にお集まり頂く方が都合よいのですが、私が勝手に申しまして少し早めにお集まり頂きました。どうも歳をとると夜の会合は敬遠したくなります。特に冬の寒い時期は駄目ですね。

奥山 大里さんにはこの場所を連絡しましたので、会合が終われば来てくれるでしょう。黒川さんの相模原支部についての質問に関して、大里支部長が作ってくれた資料がありますので、これを基にして話を始めましょう。

黒川 いやあ、こんな詳細な資料を作って頂いたので、これを見れば私の知りたいことはほとんど分かってしまいそうですね。

畠山 これだけ資料があれば、記事は書けるでしょうから後は安心してしゃべれるでしょう。

黒川 そうですね。でも資料だけみても記事は書けないので、相手と話をすることが大切なのです。実は相模原支部をお訪ねするについては、相模原のことを少しは勉強しなければと思い、地図を買ってきて調べたのですが驚きました。

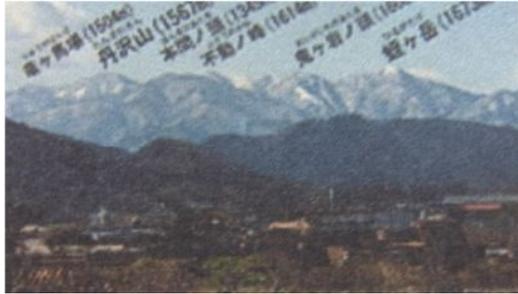
畠山 何に驚いたのですか。

黒川 なんと丹沢の蛭ヶ岳の頂上までが相模原市なのですね。冬の晴れた日には横浜の私の家からも丹沢の山々が見えますが、あの頂上までが相模原市かと思いました。

畠山 相模原の緑区は丹沢山塊を境にして南は山北・清川などの県下の町村と接していますが、北は山梨県や



東京都の奥多摩などと接しています。中央区や南区も東京都の町田市に隣り合っています。地図で見ると、相模原は神奈川県が一番北に位置して県全体の重石のように載っている感じですね。



相模原市緑区川尻地区から丹沢連峰を望む。
この連峰の稜線まで相模原市になる。

黒川 相模原は旧津久井地区は別として、「・・・原」という地名の通り全体として平らな地形で、自転車で走るには最適ですね。ただ市役所や駅のある中央区よりも、商業的に賑やかな場所が他にありますね。

奥山 相模原には賑やかな商業地が、橋本と相模大野と二つあります。それに対して市役所や相模原駅などがある場所はお役所街でここが中央区になり、橋本と津久井地区

が緑区、相模大野を中心とした地区が南区になったのです。

黒川 なるほど、相模原市の各区の特徴が分かりますね。ではさっそく資料を基にしてお話を伺いましょうか。

相模原支部内にある小・中学校の数をお尋ねしたのですが小学校からいうと中央区が 21、南区が 24、緑区が 10 で計 55 ですね。緑区は 10(17)とありますが、この表の下にある「()は津久井支部」と言うのは何ですか。

奥山 いや実は相模原は平成 22 年(2010)4 月 1 日に政令指定都市になりました。その準備段階として 2006 年 3 月に津久井町・相模湖町が、また 2007 年 3 月には藤野町・城山町が相模原市へ編入されました。だから少なくとも平成 22 年の段階で津久井支部と相模原支部は合併するはだったのですが、諸般の事情でまだ津久井支部は存続しています。ですから緑区の小学校が 10(17)というのは、友松会相模原支部に属するのが 10 校で津久井支部に属するのが 17 校という意味です。中学校の 4(10)と言うのも同様な意味です。

黒川 なるほど分かりました、その諸般の事情とはどんな事なのかは後で伺いましょう。まず相模原支部の会員数などの人員構成から伺いましょうか。

事前に支部長さんをお願いして、「今年度の市内小中学校の教員数及び友松会会員数」が分かったら教えて下さいとお願いしたのですが、大変無理なお願いをきちんと調べて下さって有りがたいと思います。

(ここで大里支部長出席)

奥山 あ、割合早かったね。御苦労さま、今日は校長会ですか。

大里 はい、今年度最後の校長会です。会場はこの近くでしたので、終わってすぐに来ることが出来ました。



相模原市役所

黒川 本日はありがとうございます。話を少し始めていたのですが、作って頂いた資料をもとに支部の人員構成の話を始めるところでした。早速で申し訳ありませんが、この表 1 の校名の所の黄色や緑色は何なのですか。

大里 黄色の上に校名が書いてある学校は、相模原支部の学校です。全部で小学校 55

校、中学校 27 校あります。緑の上に書いてある学校は、緑区にあってしかも友松会の組織では相模原支部でなく、津久井支部に属しています。しかし行政上は相模原の一部なので人事異動は当然ながら相模原支部の会員が津久井支部の学校に赴任するということがあります。ここに書かれた数字は、津久井支部の学校に異動したが、友松会の組織では津久井支部に移籍せず、相模原支部に留まっている人数を表しています。

黒川 なるほどそういうことですか。緑の各校の会員数が全部 1 なのは何故だろうと思いましたが良く分かりました。この資料を拝見すると、相模原市の三つの区の小学校数を合計すると 55 校で在籍教員数は 1453 人、その中で友松会会員の数は 66 人ですか。中学校は 27 校で教員数は 823 人で会員数は 29 人ですね。在籍数に比べて会員数が多いとは言えませんが、これは支部の努力でどうこう出来ることではありませんね。しかし校内会員が少ないということは、支部活動をする上でやりにくいことは確かでしょう。



緑区 橋本地区

大里 そうですね。市内小、中校の会員の校長・教頭の数も小学校 55 校で校長が 6 名、教頭がやはり 6 名です。中学は 27 校のうち校長が 2 名、教頭は 0 です。校長・教頭とも会員なのは、小学校に 1 校有るだけです。現状では校内の会員数は 1 校あたり 1~3 名位ですが、やはり校内に管理職の会員がいないと連絡も不便です。黒川 頂いた資料で見ると校内会員が 1~2 名の学校が多いですが、そういう校内会員との連絡はどのようにしているのですか。

大里 連絡する事項によっても異なりますが、例えば会費未納の校内会員が居る場合、支部の役員が分担してその会員に連絡します。

黒川 そうですか、分かりました。学校ごとにあらかじめ分担する役員が決まっているわけではないのですね。

ではこの辺りでちょっと話題を変えて、校外会員のことも伺いましょうか。

奥山 ではお手元に差し上げた「平成 26 年度 友松会相模原支部総会」の議案書を基に校外会員のことも含めて、支部活動の全般についてお話ししましょう。

黒川 これは 26 年度支部総会の議案書ですか。ずいぶん立派なものですね。



南区 相模大野地区

奥山 この議案書の 9 ページに相模原支部の校外会員の名簿が載っています。この名簿で校外会員の数をカウントすると 105 人です。もっともこの欄の最後の「市役所」に入っている人は卒業年度から言えば全て現職の人です。ただ学校ではなく市教委など役所関係の職場なのでねこの場所に入れてあります。ですから本当の意味の校外会員の数はこの人たちを除いた 98 人です。

黒川 「地区担当」と書いてありますが、これはその地区の会員に係わる仕事を担当して活動すると言う意味ですね。

畠山 そうです。その地区の会員から会費を集めたり、会誌「友松」を配布したり、必要な情報を伝達したり、逆に地区の会員の動静を支部の役員に伝えたりするなど大事な役目を持っています。



黒川 私の支部ではこういう地区の末端の会員にまで繋がる組織が無いので、支部活動がなかなかうまくいかず困っています。会費の納入率も悪いです。きちんとしたこういう組織があるのは羨ましいですね。

奥山 この組織があるので、OBの会費納入率は良いです。しかしOBの中にはなかなか払ってくれない人もいて困ります。

畠山 支部総会に出席した人には、その場で会費を貰います。それから同期会をやったときには他の支部の人でも、その場で友松会の会費を納めて貰います。

OBになると会費を払わなくなるのは、どこに会費を出したらよいか分からなくなる人もいるからではないでしょうか。私の同級生で横浜の瀬谷に住んでいる人ですが、退職後暫くは元の学校の校長さんに会費を持って行ったそうです。でもその校長さんが居なくなると、持っていけなくなり払わなくなったようです。

黒川 雑誌「友松」には会費の振込用紙が付いているのだが、やはり会費は人間的な同窓の繋がりです。だから相模原のように、退職後も誰かが会費を集めて来てくれると払いやすいですね。たしか横須賀支部もOBの会費の集金は、相模原と同じようなやり方をしています。

畠山 でもOBの中には会費を集めに行っても、払わない人とか「自分は友松会から抜けた」という人もいて困りますね。

大里 相模原は教員の中に国大卒がとても少ないのですが、その少ない校内会員の人が退職するといつの間にか抜けてしまうことがあります。

黒川 それでも相模原のように、このような地区担当の役員がいるのは羨ましいですよ。ところで今、相模原の教員の中に国大卒が少ないという話がありましたが、26年度は国大卒の新人が何人くらい入りましたか。

大里 小学校で1人、中学校で2人です。

黒川 その年の新採用の総数はどのくらいだったのですか。

大里 小学校84人、中学校59人です。

黒川 うーん、これは大変だ。ちょっと危機的状況ですね。もっともこれは相模原だけでなく、どの支部も同様だと思います。このままいったら友松会はあと20年で自然消滅ですね。何年かに1回、同期会をやる程度の通常同窓会は十分出来るけれども、今の友松会のように会全体としての組織的活動は無理でしょう。しかしこの問題は相模原とか横浜とか個々の支部で考えて努力するという性質のことではなく、友松会全体で考えなければ駄目ですね。そもそもこうなった原因は何なのですかね。



相模原の三つの区

奥山 最近国大のレベルが上がって、教育系では全国トップレベルで学生も全国各地から集まるそうです。そのことと関係が有るのではないですか。

黒川 教育系の中で国大のレベルが上がっているのは事実のようです。8月初めの国大の夏のオープンキャンパスに行ってみると、高校生や受験生がいっぱい押し寄せてきます。

奥山 秋のホームカミングデーより多いのですか。

黒川 全然問題にならないくらい多いです。もっとも全部が教育志望ではないでしょうが。いまの受験生の殺到振りを見ると、今だったら私は合格出来ないね。

レベルが上がって優秀な学生が集まるのは良いが、地方から来た人の中には卒業すると県内には残らず、自分の故郷で就職する人も居る。現に私の知っていた国語の学生は昨年卒業して故郷の山梨に帰ってしまいました。故郷に帰るなどは、人情からして言えないしね。

いずれにしてもこの問題は友松会で考えて解決できることではなく、大学に協力してもらうことが必要ですね。

奥山 何年か前には国大の学生に「県内枠」というものがあって、県内出身の学生を優先的にとる、ということがあったようです。

黒川 それは友松会から要望したのですか。

奥山 いやそうではないようです。その頃「教員養成課程の存続問題」があつて友松会も署名活動をやりましたが、そのときに「県内枠」が出来て同じレベルの受験生だったら県内出身者を優先しようという考えがあつたようです。

とにかく国大は大学全体として、もっと卒業生に近づいて欲しい。東北のある国立大学ですが、神奈川県内の卒業生の同窓会に大学から人が来るそうです。

黒川 県内各地で国大卒業生の採用が少ないと言うのは、何とかしなければいけない大問題ですね。

話が変わりますが、相模原支部の組織の特徴としては「地区担当役員」の他に、どんなものがありますか。

奥山 総会議案書の3ページに「支部役員名簿」がありますが、副支部長5人・理事2人・評議員3人・会計4人というように、役員の数が多いのが特徴です。それらの役員の卒業年度をみると、昭和52~63・平成2~6年など卒業年度が若い人が多い。こういう若い人達に出来るだけ早い時期に支部の役員を経験してもらって、次の世代を育てようという意図です。

畠山 支部長も昔はOBが勤めていましたが、15年前から現職の校長が勤めています。当時は県の友松会も「現職が支部長をやるのが望ましい」と言っていました。でもそれに従ったと言うだけでなく、支部長がOBだと「友松」や連絡の印刷物を何処で受け取ったらよいか不便だという事情もありました。現職の校長が支部長



オープンキャンパス当日、シャトルバスに乗り込む見学者と受付の混雑

なら学校宛に送ってもらえば良いですからね。

黒川 なるほど、いろいろなことを考えて現在のような支部組織になっていることが分かりました。

では相模原支部の一番の課題である「相模原と津久井の支部統合問題」について伺いましょうか。

畠山 私が本部の副会長をしているときに、「津久井支部をどうするかは、津久井と相模原の両方で相談してくれ」とのことでした。私はその頃に津久井支部の総会に来賓で出席したことがあります。津久井には80代の元気な先輩がたくさん居ました。津久井の若い人たちは相模原と一緒にしても良いという考えだったのですが、元気な先輩たちが相模原支部との合併に乗り気ではありませんでした。だから無理をせず、そういう先輩の影響が少なくなったら合併を考えようとのことだったのです。

奥山 津久井も行政的には相模原に入っているし、教員の人事交流もあるという状態だから、両支部はもう合併した方が良いと思う。

黒川 これは私の想像なのですが、津久井の先生たちの中には父親も祖父も教職にあったという人が居るのではないかと。つまり代々師範学校に行き、あたかも世襲のように地区の学校の先生になるという人が多かったのではないかと思います。昔は交通も不便で他の地区から通勤するのも大変だったでしょうからね。

畠山 確かにそういう傾向もあったでしょうね。

黒川 だから津久井の先生たちは、良く言えば同志的に結びついて親しかった。別の言い方をすれば、多少排他的な傾向があつたかもしれない。それが先輩方の中に残っていて、相模原との合併をためらわせるのかも知れませんね。

しかし奥山さんも言うように教育行政的には相模原と津久井は一体となっている、というより津久井は相模原の一部なので両支部もいずれは合併するでしょう。でも反対の気持ちが強い先輩が残っている間は、無理をせず時間をかけてじっくりやっていくべきでしょうね。

あと一つ、相模原は政令指定都市になって区制がしかれました。横浜や川崎のように各区ごとに支部を再編成し、相模原中央支部・相模原南支部・相模原緑支部の三つに分けるという方向もありますが、相模原はどうするのですか。

奥山 その件に関しては、区制が施行されているが相模原支部は分割しないという方向でいくつもりです。

黒川 そうですね。横浜・川崎の例で見ても、支部を区別に分けて再編成することが本当に良いことなのか、いろいろ意見があることでしょう。国大の卒業生の新採用の人数がこれほど少なくなっている現状では、分けないほうが正解かも知れませんね。

本日はお忙しいところをお集まりいただき、相模原の現状や課題についてお話をいただきましてありがとうございます。それでは本日の集まりはこれで終わらせていただきます。(H.27.3.10)

